



パラディオ (Palladio, Andrea) 『建築四書』

《目 次》

オンラインレファレンス(試行版)サービスの公開について・・・2 御園 和之(総合閲覧課)	角田柳作展 in ニューヨーク10 藤原 秀之(調査役)
本を大切に3 渡邊 幸弘(総合閲覧課)	展覧会案内11 松尾 亜子(資料管理課)
インストラクター講習会開催報告4 仁上 幸治(所沢図書館)	西洋古典資料保存講習会に参加して12 夏井 友子(資料管理課)
当代中国地方志コレクションについて6 高木 理久夫(資料管理課)	早稲田大学図書館への寄贈図書について13 宇田川 和男(資料管理課)
Innovative ユーザ会定期大会参加報告8 重嶋 まみ(情報管理課)	途絶した『歌学大成』14 松本 智子(特別資料室)
早稲田の古典籍 ここだけの話(1)9 松下 眞也(図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室)	図書館だより16

電子ジャーナルやデータベースなどは自宅から利用可能なものも多く、図書館に来ることが資料閲覧の必須条件ではなくなってきました。そこで当館は「非来館型」サービス拡充を課題とし、オンラインによる各種申込インタフェース(リクエストや資料取り寄せ)を増やし、このたびレファレンス質問もポータルで受付ける仕組みを実現しました。新しい取り組みの一方で、物としての図書はサービスの要であり続けています。ところが、そうした蔵書の少なからぬ部分が破損を蒙ってしまうという現実があるのです。これらの話題につき、利用支援部門からレポートを二つお届けします。(総合閲覧課)

オンラインレファレンス(試行版)サービスの公開について

御園 和之(総合閲覧課)

・オンラインレファレンスとは

このサービスは、「必要な図書/論文が見つからない、どこで利用できるのか知りたい」、「WINE(蔵書検索システム)やその他の検索ツールの使い方がわからない」、「ある事柄や人物等について知りたいが調べ方がわからない」など、従来中央図書館2階のレファレンスカウンターなどで直接お受けしていたようなご質問を、オンラインによりご自宅や研究室からでもお寄せいただき、土日祝日等を除いて原則として5日(通常は1~2日)以内にE-mail(Waseda-netのE-mailアドレス)によりお答えするものです。

このようなサービスは、公共図書館では活発に行われています。大学図書館でも、徐々に例が見られるようになり、今後の導入を検討しているところも多いようです。

・質問をするには

質問は、Waseda-netポータルの申請フォームからお送りいただくことができます。申請フォームの入力項目については、図書館側で、事前に多くの情報を把握・整理しておく必要があるため、質問本文の他、「質問タイトル」、「典拠」、「調査済データベース」などの項目に回答いただくようご協力をお願いします。

・回答までのプロセス

申請フォームから送られた質問は、総合閲覧課のオンラインレファレンス担当者、課長等をメンバーとする専用のメーリングリスト宛に送信され、担当者間で調査・協議のうえE-mailで回答します。さらに受けた質問、およびその回答(案)は、図書館内で情報を共有し、今後の参考とさせていただきます。また、質問内容によっては、最初の段階で、図書館全体の

中から該当する専門分野に詳しい館員が調査にあたります。また、質問と回答だけではなく、調査のプロセスも記録・保管することにより、個別の事例に留まらない組織的なサービス向上が期待されます。

・その他のオンラインサービス等について

購入希望図書申込、整理中図書利用希望、文献複写・取り寄せの申込については、それぞれ専用の申請フォームをご用意しておりますので、そちらにお送りください。また、図書館に対するお問合せ、ご意見・ご要望は、info@wul.waseda.ac.jpでお受けしております。

・オンラインレファレンスのこれから

現在のところ、一週間に1,2件の質問をいただいておりますが、いわゆる「非来館型図書館サービス」の柱と言えるほどの件数にはまだまだ達していません。多くの方に、気軽にご利用いただけるようになれば幸いです。

今後は、更なる活性化を目標とし、その手立ての一つとして、図書館ホームページのリニューアルに合わせて、オンラインレファレンスの質問・回答の事例集を質問者の個人情報(氏名・所属等)を除いた形で公開することを予定しています。ぜひご覧ください。

■レファレンス質問の例

- 例1:「早稲田大学の開校式で、伊藤博文がスピーチをしたらしい。その全文を読みたいがどこに出ているか?」
- 例2:「早稲田大学で過去に行われた、シンポジウムや講演会の資料、撮影した映像等の貸し出し、または閲覧は可能か?」
- 例3:「ある研究者の没年を調べたい。」
- 例4:「アメリカのある△△大学の年次報告書、研究紀要には、具体的にどのようなものがあるか知りたい。」
- 例5:「韓国の○○という博士論文、とその参考文献や、英文要約や日本語要約などを読みたいが探し方が分からない。」
- 例6:「図書館が所蔵する明治時代の古い英和辞典を閲覧するにはどうしたらよいか。」

— 本を大切に —

渡邊 幸弘（総合閲覧課）

利用者の皆さんは日頃から図書館の資料を閲覧・複写し、あるいは借りて研究や学習等に活用されていることと思います。皆さんの手元にあるとき、本は個人の持ち物のように感じられることもあるでしょう。しかし図書館で所蔵している資料は、本当は一人のものではなく、図書館を訪れる人々皆の共有財産なのです。ところが最近、貸出中の資料の紛失、あるいは破損・汚損が頻繁にあり、中央図書館だけでも年間で300件を超える届け出があります。

中央図書館をはじめとして多くの図書館・図書室で所蔵している資料が借りられるなど、利用者の利便性は高まっていますが、反面、借りている資料が共有財産であるという意識は低下しているように思われます。資料自体の経年劣化もありますし、利用されてこそ意味がありますので、通常の利用による軽度の破損はある程度やむを得ないことですが、不注意によって資料が利用できなくなる場合が多いのは残念なことです。

理由を伺うと、紛失については、図書館内や学内、また電車内や移動先での置き忘れが多く、中には自宅で紛失した例もあります。また、書き込みや線引きなどのほかに、最近多く目にするようになったのが不注意による汚損です。雨の日に蓋の閉まらない袋に入れて図書を濡らしたり、飲食物の付着、小動物（犬や猫、ねずみ類）の噛み痕、ひどい場合は衣類とともに洗濯してしまったというような事例もあります。さすがに図書を洗濯してしまった学生は申し訳なさそうにしましたが、汚損しているにもかかわらず平然と返却カウンターに持って来る利用者がいるのも事実です。

紛失の場合も破損・汚損の場合も、原則的には現物弁償をしていただいています。とはいえ借りた図書を利用できないようにしたから買い換えれば良いというものではないと思います。中にはその資料をどうしても使いたいと予約をする利用者もいます。しかし、一人の不注意が、後の利用を不可能にしてしまうこともあるのです。

補修や再製本、買い替えなど資料の保全には図書館も努力してまいります。利用者のみなさんに

も冒頭でも触れましたように、図書館の所蔵資料がすべての利用者（現在も、そして将来も）の共有財産であることを意識しながらご利用をくださるようお願いいたします。（2008.9.25記）



右：誤って洗濯されてしまった文庫本。補強用のブックカバー（ビニール）により、表紙・裏表紙だけ残り、中身は溶け固まった状態。

左：食べこぼしと思われるシミがあり、本の中にも浸透している。さらに表面にカビが発生している。

〈インストラクター講習会開催報告〉

文献調査法の専門分野別最先端情報の共有へ向けて

—研究室内知識伝承者を養成するインストラクター講習会の試み—

仁上 幸治（所沢図書館）

1. はじめに

所沢図書館におけるインストラクター講習会の企画は、2008年1月の図書委員会で提案・了承され、4月、人間科学学術院とスポーツ科学学術院の両教授会で協力依頼が行われ、5月、両学術院計132研究室中21研究室から28名のインストラクターが選任された（主に大学院生）。6月4日、「研究室単位の「文献検索指導者」養成講座」と題して90分の講習会を開催。活発な質疑応答が行われ、キャンパス全体の情報リテラシーの底上げの必要性、専門分野別研究調査法の公開と共有への展望、パスファインダーの作成等の実践的な課題が確認され、研究室単位での知識伝承を目指す公式の取り組みを立ち上げることができた。

2. 現状

大学の情報リテラシー教育への図書館による直接貢献策を仮に4つに区分して紹介する。

第一の柱は、図書館オリエンテーションである。学部では2005年度に復活させ、スポーツ科学部は学部オリエンテーションの中で1回、人間科学部はクラス単位の出前授業方式で8回実施。2006年度に両学部とも学部オリエンテーションの枠内に図書館のコマ（45分）で実施。2007年度からは35分で出席率ほぼ100%を達成した。

大学院には、2004年度まで図書館オリエンテーションの機会がなかったが、2005年度に研究科オリエンテーションの時間中に8分間の枠をいただき、2006年度に50分枠に拡大し、2007年度は「論文作成のためのデータベース検索法—先行研究調査の必須知識—」と題して、大学院レベルの文献調査法入門の講義を行った。出席率70%。2008年度はさらに60分枠に拡大、出席率60%、総合満足度3.94（5点満点）¹⁾。

第二の柱はデータベース講習会である。3年生以上を対象に、昨2007年度は5月10日から6月5日に計9回開催、ゼミ単位の先行予約制と個人予約で計374人参加。今2008年度は、縮小方針に転換し、全

5回で個人予約のみとし、座席数264に対して、予約者226、キャンセル9、最終予約者217、欠席者13、出席者204で予約出席率94%。当日予約なし出席者6を加えた実出席者210で定員充足率80%、総合満足度3.83であった。

第三の柱は授業支援である。ゼミは人間科学部では3年生前期から、スポーツ科学部では2年生後期から始まる。もしも、図書館オリエンテーションと基礎演習科目の直後の1年生後期と2年生前期に、文献検索演習科目が設置されていれば3年生のデータベース講習会までの間の空白が埋まる。そこで2007年度からの科目新設を目指して、人間科学部と所沢図書館・中央図書館とのあいだで協議が続いたが、残念ながら担当時間数が折り合わず実現に至らなかった。

第四の柱は教材提供である。映像教材『情報の達人』（DVD版）は、その監修に所沢図書館の私が携わった経緯から所沢キャンパスで撮影され、2007年2月に発売された。紀伊國屋書店のご厚意により20セットが無償貸与され、2007年度の人間科学部1年生前期必修科目「基礎演習」の教材として採用され、全27クラスにおいて2～3回視聴された。スポーツ科学部においても一部の授業科目で教材として利用された。2008年7月、オンデマンド教材として《CourseN@vi》上で配信する共同研究開発事業の契約が成立し、所沢キャンパス所属の計5千人強の教員・学生が学内外から利用できるようになった²⁾。

3. インストラクター講習会の狙い

情報リテラシー教育支援をさらに拡充するには、図書館側の組織と人員の姿勢が鍵を握る。論文作成に必須な文献調査のためのデータベース講習会は盛況であるが、全5回で合計200名程度の参加者数では、受講者数は1学年1200名の15%にすぎない。参加機会がなかった利用者にも同様の学習機会を提供するために、講習会のより一層の充実が求められていることは明らかである。

しかし、専任職員の減少と業務委託の拡大が進む職場環境が戦線縮小論を後押ししてしまう。図書館員自身が直接指導するより、利用者の自助努力を推奨してはどうかというスタンス変更のアイデアが浮上してくるのは半ば必然である。

そこで設定されたのが、第五の柱、インストラクター養成である。研究室ごとに指導者を養成し、最新の研究動向や文献調査法情報を蓄積・整理・伝承していただくというのが趣旨である。

事前に、各研究室の教員に対して、インストラクターの望ましい条件として、1)データベース講習会を修了している、2)指導する意欲と姿勢がある、3)講習会の成果を教材資料としてまとめ、研究室ホームページ等へ反映させる技能がある、の3点を勘案して選任するよう依頼しておいた。

当日は、レファレンスサービスや講習会の中で蓄積されてきた図書館員の経験から、「なぜ指導が必要か」「なぜ活用できないのか」「どうすれば活用できるようになるのか」について、初心者に指導する側に必要な基礎理論と応用技能を247枚のスライドショーで解説した³⁾。

4. 成果

今回は、21研究室とはいえ、所沢キャンパスにおける情報リテラシー教育の問題点、論文検索や所蔵検索で躓く原因、文献調査力を総合的に底上げする対策の必要性などを共通認識とすることができた点が大きな成果である。

5. アンケート結果

講習会直後に、《Waseda-netポータル》上で参加者アンケートを実施した。貴重なご意見ご要望が多数寄せられた。文献データベース検索について授業で学んだことがある利用者が3割程度にすぎないというアンケート結果から、情報リテラシー教育の体系的カリキュラムの弱点と、研究室での指導教員・上級生任せの現状が読み取れる。

記述には、現状と問題点について、「図書館の方々の『情報リテラシー教育を改善したい』という使命感がひしひしと伝わってきた」「すぐに図書館に調べに行きたい気持ちになった」「後輩に学術論文検索について伝えなくては！」など、前向きな感想が目立った。また、「もっと具体的な話を聞きたかった」「そもそもインストラクター側の能力を高める必要がある」「図書館でのトラブル事例な

どをQ&A形式でまとめたものなど、より実践的な情報をいただけたら」「原因の部分でなく、対策の部分をもっと厚くして欲しかった」などの要望も目立った。

次のステップは、スライドショーの作り方、コンテンツの保存・加工の方法、ホームページ上でのパスファインダー（情報探索ガイド）の公開方法等についての技術的な講習会である。

6. 当面の取り組み計画

問題の共有化、動機付けのあと、研究室単位の組織的な取り組みへ向けてどう離陸するか。その成否は今後の具体的な活動支援計画しだいである。改善のエネルギーを具体的な成果に結実させるには、個々のインストラクター自身に、研究室の教員、先輩、同僚、後輩の理解と協力を仰ぎつつ、自らの力量を向上させ、各種のツール作りを推進してもらわなくてはならない。教員や図書館員の側にも、自らの本来業務の「丸投げ」と受け取られないよう、彼らを積極的に指導し支援する責任がある。

所沢図書館としては当面、eラーニングコンテンツの提供と併行して、メーリングリスト上での情報提供、講習会や会議の開催などの形で、各インストラクターの活動を支援して行きたい。

7. 展望

この取り組みが軌道に乗れば、各研究室内ではより効果的効率的な文献調査法が組織的に伝承されるようになり、他の研究室・学科・学部等との間で教育研究を相互に支援しあうことも可能になる。いずれ各種パスファインダー群は専門分野別、レベル別、用途別等の巨大なリンク集に成長していく。高品質なパスファインダーは実用検索ツールあるいは情報リテラシー教材として、学内だけでなく他大学・他図書館、さらに一般市民にも活用されるようになり、大学の知財による社会貢献の一形態としても広く注目されるに違いない。

■注

- 1) 早稲田大学所沢図書館ホームページ：
<http://www.wul.waseda.ac.jp/human/index-j.html>
- 2) 『情報の達人』の活用方法：
<http://www.wul.waseda.ac.jp/human/johonotatsujin.html>
- 3) インストラクター講習会のご案内と報告：
<http://www.wul.waseda.ac.jp/human/koshukai2008-instructor.html>

当代中国地方志コレクションについて

高木 理久夫（資料管理課）

【館内は静粛に】

「おー、すごい!」、「見て、これ、わたしの故里!」— 中国からの団体訪問客が一斉に声をあげる一角が、中央図書館の研究書庫にある。地下2階中国語図書コーナーの先頭に置かれている、『中華人民共和国地方志叢書』のコーナーである。北京国家図書館等、一部の大図書館を除いて、これだけ市や県の地方志が集められ、なおかつ手にとって読むことのできる図書館は、もしかしたら、世界中でも早稲田大学中央図書館だけかもしれない。中国国内では図書の流通が限られており、とてもこれほど各地の地方志を収集できないという感想を、客人からうかがったこともある。まさに中国人ゲストのおもてなしコースにおけるメインコーナーであるが、図書館員としては、静粛であるべき研究書庫内での時ならぬ歓声に、うれしくもあり、内心、ひやひやもするのである — 「あのお、すみません、もう少し、お静かに、フラッシュ撮影はご遠慮ください」

【コレクションの概要】

現在、『中華人民共和国地方志叢書』のコーナーに配架されている、各省、市、地区、自治州、県等の地方政府が編纂、出版した地方志の冊数は、3,316冊である（事務用受入表による）。

さらに、どれだけ上記地方行政区に関する地方志をカバーしているのか、『中国行政区划地名手冊1999』（北京 中国社会科学出版社 1999）をもとに調査してみたところ（香港特別区とアモイ地区を除く）、3,200を超える地方行政区のうち、1,994箇所に関する地方志が所蔵されていること、すなわち中国の地方行政区のうち60%以上をカバーしていることがわかった。ただし、チベット自治区のように、複雑な政治情勢を抱えている地区があり（チベット自治区の現代地方志に関しては、2008年8月現在、当コーナーでは2冊しか配架されていない）、3,200のすべての行政区が地方志を出版しているわけではないので、「刊行された地方志のうち、どれだけの図書を所蔵しているか」という面で見れば、

カバー率はもっと上がるだろう。

【地方志による調査】

さて、このような中国各地で出版されている地方志によって、実際にどのようなことを知ることができるのだろうか。次に具体的な事例を記してみることにしよう。

◆自然環境について

本年5月12日、四川大地震が発生し、甚大な被害をもたらしたことは、まだ私たちの記憶に生々しい。震源地とされる四川省汶川県は、いったいどのような自然環境におかれた県なのだろうか。『中華人民共和国地方志叢書』コーナーには、2007年に刊行された『汶川県志（1986-2000）』が配架されている。この図書により、汶川県における地震状況について調べてみることにしよう。

第二篇自然環境に目を通して見る。すると他の地方志にはめったに記載されていない地震に関する記事が、第七節にまとめられている（52-54頁）。それによると、汶川は中国を南北にわたる地震帯、龍門山断裂帯の中央南寄りに位置し、地震が多く、揺れが激しいと記す。さらに、1986年から2000年までの15年間、県内で発生した「震級」（マグネチュードとは基準が違う）2.5級以上の地震に関する表（表2-5）と、県内及び近隣地区で発生した4級以上の地震に関する表（表2-6）が掲載されている。これらによれば、汶川県内では40回、県内及び近隣地区では16回の大きな地震が記録されている。したがって1986年から2000年までは1年間に4回近く、大きな地震が発生していることになる。まさに、中国有数の地震発生地区であることがわかる。ちなみに、汶川県の中心、威州城の全景カラー写真が巻頭に掲載されている。岷江沿岸にはすぐ急峻な山塊が迫っており、細長い市街地はまるで川に浮かぶ船のように見える。このような情景を見てみると、5月の大地震による被害は、想像に余りあると思ひ至るのである。

◆人物伝記について

清末の外交官で、草創期の早稲田大学図書館に

多大な貢献をした銭恂（1853-1927）。その妻、単士釐（1858-1945）は、日本をはじめ海外に渡航した経験を、中国人女性として初めて著し（『癸卯旅行記』光緒30年）、さらに幾つかの著作を有することで、近代開明期における先駆的な女性として、現代中国において評価が高い人物である。夫の銭恂は、彼女について、杭州蕭山の生まれで、父は同治元年の挙人で嘉興県学の教諭である「恩溥公」とであると、その家譜『吳興銭氏家乘』に記している。いったい実名は何と言うのだろうか。同治元年（1862）の挙人、すなわち科挙の第一段階である郷試の合格者だと言われても、その年の郷試の合格者など中国全土で星の数ほどとは言わないまでも、相当な人数である。そこで、彼が県学の教諭として活躍した嘉興県の地方志、『嘉興市志』（1997年刊）を『中華人民共和国地方志叢書』コーナーから取り出し、恩溥公の実名等について調べてみることにしよう。

『嘉興市志』は全3巻で、第3巻第48篇が人物伝記にあてられている。嘉興市は、2つの市轄区、2つの県、3つの市を含む大きな市で（地級市という）、ここには古代から現代まで、590人の伝記が収められている。その「海寧市」（蕭山は現在、海寧市に属する）の章、2201頁には単士釐の伝記が掲載されている。父の名は「棣華」といい、学識が備わった人士であり（「系飽学之士」）、かつて嘉興等の地で教諭をしており、単士釐はその家庭の薫陶を受け、博学能文であると記されている。単士釐自身の項目はないが、娘の伝記により、その実名を知ることができた。ちなみに、他の単氏を検索してみると、「単不庵」（1878-1930）なる人物の伝記が掲載されている（2195頁）。彼の父は沅華といい、棣華は伯父にあたり、二人とも宋学を修めていたことで名声があったという。蕭山単氏は、宋代、朱子にはじまる理学を家学としていたことがわかるのである。

◆当代の歴史について

この『中華人民共和国地方志叢書』コーナーに収められた地方志は、文化大革命後、1980年代になって各地から陸續と刊行されてきたものである。したがって、今だもって全容が明らかにされていない文化大革命期間（1966-1976）の、地方における情勢を、各地方志を定時的に見ることで、把握

することが可能である。たとえば、1966年5月16日は、中央政治局拡大会議により、文化大革命の綱領的文書である「中国共産党中央委員会通知」、通称「5・16通知」が採択され、文革がひとつの頂点に達した日である。この日を定点にして、各地の文革情勢は、どのように変化していったのだろうか、貴州省のいくつかの地方志から、その「大事記」に掲載された記事のいくつかを見てみることにしよう。

毛沢東が共産党の指導権を掌握した1935年の遵義会議で名高い、貴州省北部の遵義市、その『遵義市志』全3巻（1998年刊）によれば、「5・16通知」が党の幹部に伝えられたのは、5月27～28日のことだという（伝達された日付が記録されている）。6月29日、共産党遵義市委員会に「文化大革命領導小組」が成立、中学校では紅衛兵が組織され、旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を打ち破れという扇動により、市内の文物が破壊され、7月21日には小学校の教師の多くが批判と陵辱を受けたという。貴州省西南部にある普安県の『普安県志』（1999年刊）によれば、7月26日、「普安県文化大革命領導小組」が成立し、10月には文革が猛烈に進展し、まるで考えが異なる紅衛兵が学校ごとに組織され、これまた考えがばらばらの群集組織、「戦闘隊」や「戦闘団」の一類が企業や機関において組織されたという。貴州省南部、独山県の『独山県志』（1996年刊）によれば、7月22～25日にかけて公安政法会議が開催され、文化大革命中の治安工作が検討されたが、普安県と同様、10月になり文革が激化、これに関わる情勢の中で、12月28日11時、恵水城で列車が転覆、死者1名、11名重傷、20名軽傷の重大事故が起こっている。

これら一連の貴州省における情勢は、同省の他の地方志中、「大事記」1966年の記事を抽出し、貴州省及び中国全体の情勢を対照させることで、より鮮明に浮かび上がってくるにちがいない。

以上、当代中国地方志について、今後、研究者の皆様方の、さらなるご利用を願う次第である。

（2008.10記）

Innovativeユーザ会 定期大会 参加報告

重 嶋 ま み (情報管理課)

2008年春、INNOVATIVEユーザ会 (IUG: Innovative Users Group) の第16回年次大会 (16th Annual Meeting) に、総合閲覧課大坪と情報管理課重嶋の2名で参加した。

■INNOVATIVEユーザ会 定期大会とは？

米国のInnovative Interfaces, Inc. (以下、III社) は、世界4,500もの図書館にシステムを提供する世界を代表する図書館システムベンダーである。ユーザ同士が交流を深め、互いの創意工夫を発表し合う場が、年に1度のこのユーザ会である。

日本唯一のユーザである早稲田大学も、より良い「WINE」システム¹⁾の構築を目指し毎年参加しており、ベンダーと直接交渉できる絶好の機会にもなっている。

■会議の概要

日程：2008年4月28日～30日 (3日間)

会場：Washington, D.C. Omni Shoreham Hotel

参加人数：1,600人以上

■内容

★III社との直接交渉

日本語特有の問題を抱える早稲田大学にとって、システムのアップグレード時等に発生するシステム障害は予期が難しく、電話やメールを中心とした米国との交渉はいつも困難を極めた。今回III社との直接交渉により、WINEシステムのテストサー



III社との交渉 (右から2番目が筆者)

バの導入が認められ、より安定したシステムの運用が期待されることとなった。

★ユーザの多様な取組み

大会期間中絶え間なく開催される数多くのセッションでは、他国の図書館がPerlやJavaScript等を駆使し、自館独自のサービスを多様に展開しよう

としている姿に感銘を受けた。OPACのカスタマイズやその活用方法など、参考となる事例が多くあり、大きなヒントを得ることができた。

★III社からの情報発信

世界中からユーザが集まる本会ではIII社からの情報提供も積極的に行なわれ、ユーザが抱える悩みをシステムがどう解決してくれるかという情報を提供してくれる。今年始まった「Library Service Live!」は、セッション間の休憩時間という短い時間で開催される少人数制のセミナーで、各ユーザ個別の事情にも積極的に対応していこうとするIII社の姿勢が印象的であった。

■米国議会図書館見学

本会は毎年、米国内各都市を順にめぐる形で開催される。今年は偶然Washington, D.C.での開催だったことから、世界最大の図書館である米国議会図書館 (Library of Congress、以下LC) を見学させていただいた。

写真：Main Reading roomの様子



司書の方々へのインタビューを通し、彼らの専門家としての意識の高さ、LCで働くことへの誇りと情熱を感じ、とても大きな刺激を受けた。早稲田大学図書館でも今年からサービスを開始したオンラインレファレンスについては、ノウハウの一端を教えていただくことができ、その手厚いサービス内容と合理的な運用に驚いた。米国がいかに自国の知への誇りを持っているかということ、LCのMain Reading room でひしひしと感じた。

1) 「WINE」は早稲田大学オンライン公開目録の愛称

早稲田の古典籍 ここだけの話（１）

松下 眞也（図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室）

早稲田大学図書館でここ数年力を注いできた古典籍総合データベースの作成も、文学・歴史といった主要な分野がほぼおわり、山を越えた感じがする。アクセス数も昨年と比べ倍増しており、世に好評をもって迎えられているようだ。

ところで、「古典籍」（こてんせき）という言葉は、皮肉なことに、実は古い日本語にも漢語にもなかった新しい言葉である。「大言海」にも「日本国語大辞典」にも載っていない。「広辞苑」にも載せられていなかったが、2008年に出た第6版によりやうやく採録された。これは早稲田のデータベースの影響……と言いたいところだが、もちろんそうではない。反町茂雄（1901－1991）という人が書いた、『日本の古典籍 その面白さ その尊さ』（八木書店、1984）という本によって、あるいは、国立国会図書館に「古典籍課」という名称の課ができたことによって、しだいに定着した言葉と考えるべきであろう。

反町茂雄氏は、弘文荘（こうぶんそう）という伝説の古書肆の主で、戦前から、おびただしい数の古典籍資料にかかわってきた人である。

早稲田が誇る貴重な古典籍資料の一つに、吉田兼好の『つれづれ草』の古写本がある。室町時代の「古今伝授」の継承者、東常縁（1401－1494）の自筆写本と伝わるものである。これはかつて、故村井順氏の所蔵していたものであり、村井氏はこの写本を「兼好初稿本にもっとも近いもの」と位置づけている。ただし遺憾なことに「上巻」のみであった。同じ本の下巻は、海外の収集家の所有に帰しているという。

1988年ごろ、その『つれづれ草常縁本』の下巻が、「クリスティーズ」の古書オークションに出品されるという情報もたらされた。これは早稲田で落札しなければならない。私はぜひ出張したいと思ったが、都合がつかず、海外に支店をもつM書店の人に代行を依頼した。

ところがそのオークションに、反町茂雄氏が行くという噂がつたわってきた。著書にもあるよう

に、これまで、海外流出した幾多の貴重な古書を買ってもどしてきた辣腕の氏のことであるから、むしろ『つれづれ草』なんか見逃すまい。一抹の不安をおぼえた私は反町さんに直接電話をかけた。

早稲田の図書館ですがというと、

「はいはい、お世話になっております」

と愛想がいいので、私は、

「こんどのオークションに、徒然草常縁本の下巻が出るようですが、あれは早稲田に上巻があるものですので、そこのお含みいただければ」といった。本来オークションというものは自由なはずで、誰が何に入札しようがかまわない建前だから、あんまり強く「入れないで」とはいえない。あとで早稲田が圧力かけてきたなどと言われても片腹いたい。ということで微妙な言い回しになったわけだが、これに対する反町氏の返答に、私は耳を疑った。

「は、もしもし？ あのう、わたくし、老人でございますので、ちょっと耳が遠くて……」

このとき、反町さんは80歳代後半だったから、まあ本当に聞こえなかったのかもしれないが、うまくとぼけられた。代行を立てたせいもあり、早稲田は『つれづれ草』常縁本の下巻を落札できなかった。落札したのは、やはり反町氏であった。役者が何十枚も上であったというしかない。

『つれづれ草』常縁本の上下合体はならなかったが、一つの古書が早稲田大学図書館の貴重書庫におさまるまでには、信じられないような数奇な経緯をたどる場合が多い。昔、いったん早稲田に寄贈されかけながら、その後行方不明となり、数十年後、関係者が死に絶えた後に、ひょっこり早稲田に入るものもある。古典籍総合データベースの公開により、それらの資料が世界のどこからでもいつでもアクセスできるようになったということは、画期的な意味のあることなのである。

角田柳作展 in ニューヨーク

藤原 秀之（調査役）

2007年10月から12月に開催された角田柳作展やそれにかかわる各種イベントについては、本誌上でもたびたび紹介してきた。前号では企画全体とシンポジウムについて報告し、これまでの総括をおこなった。だが展覧会は今年もまだ続いている。会場はアメリカ、コロンビア大学である。

早稲田とともに角田のもう一つの母校と言ってもよいコロンビア大学でも展覧会を開催しようという話は、昨年の角田展の準備段階から両校の間で確認されていたが、2008年の4月に入ってから俄かに本格化し、実務に関する調整が進められてきた。具体的には、会期・会場



の決定、出陳資料の確定、資料搬送方法の確認、各種印刷物の作成、キャプションの作成などである。

6月頃をメドに開催するという話もあったので、時間的にギリギリとなるこの時期に、早稲田側からおおよその展示概要を提示し、それを元に詳細をつめていくという形で構想を固めていった。

会場については、当初からコロンビア大学の人文系のメインライブラリーであるButler Libraryにある貴重書室(Rare Book & Manuscript Library, RBML)の展示スペースを利用するという案が示されていたので、まずはその概要を把握することからはじめた。RBMLは建物の最上階(6階)に位置し、コロンビア大学図書館が所蔵する貴重書の収集、公開のための図書室であり、角田柳作と直接の関係は無いのだが、壁面が展示スペースとなっているため、この場所が用意されたのである。現地の担当者である東亜図書館の野口幸生女史から、展示ケースの大きさや材質などを教えていただき、日本で開催したときのデータと突合せ、全体のレイアウトを確定していった。今回の会場は、独立した展示室ではないという欠点はあるものの、角田の生涯をたどるという展示内容を考えると、

横長のケースはかえって使いやすいように思われた。

会期は6月12日を初日8月27日までの2ヶ月余に設定、6月11日にオープニングセレモニーをおこなうこととした。

昨年は角田の故郷である群馬から遠戚にあたる角田修氏、角田昭氏、県立文書館などから多数の資料を借用して展示したが、今回は遠方であり、また最初から長期間となるのがわかっていたので、それらについては精細なカラーパネルで対応し、現物は早稲田とコロンビア大学が所蔵する資料のみとし、日本での展示とほぼ同内容で構成したが、軸、額装のものはその形状に合わせてパネルを作り、特に色紙は原寸大で作成、色紙額に入れて展示したので、一見すると現物とみまごう仕上がりとなった。

和英文併記してあった挨拶文や各コーナーのリード文は英文を上にした形にすべて作り直し、個々の資料のキャプションも野口さんに英訳していただいた。さらにポスター、チラシなどもすべて英文仕様のものを作成、ここでも翻訳は野口さんの手に拠った。この間のコロンビア大学(野口さん)とのやり取りはすべてメールで行なったが、時差の関係もあって、どうしても時間がかかってしまったが、なんとかすべての準備を整え、紀伊國屋書店の協力を得てポスター、チラシ、そして出陳資料をコロンビア大学に送ることができた。あとは現地での設営である。

早稲田からは藤原と松尾(資料管理課)が6月8日に渡米、翌9日に設営作業をおこない、1日遅れて宗像副館長が渡米、オープニングセレモニーに備えることとした。

9日朝、Butler Library前で野口さんと待ちあわせ、早速RBMLに。入り口で司書のLee女史が満面の笑みをうかべ、迎えてくれる。早速展示スペースと事前に送っ

ておいた資料の確認をする。展示スペースは野口さんの話どおり、11のケースにわかれた壁面と平台



が1台である。全面に古びたクロスが貼られた壁面に、レイアウトに従ってパネルを貼っていった。ケースが聞いていた大きさどおりだったので、まったく支障なく作業は進み、先方の手を煩わせることも無く問題なく設営を完了した。100点近い資料がまたたく間に設営されたことに、RBMLの皆さんもたいへん驚いていた。

9日夜には宗像副館長も到着され、翌10日に準備の状況を確認していただき、同日夜にはこれまでもたびたび本誌上で紹介している甲斐美和女史と会食、90歳を超えているとは思えない元気そうな話しぶりと、その健啖に圧倒されつつ、楽しい時間を過ごすことができた。

翌11日夕刻、Butler Libraryでオープニングセレモニーが開催された。当初は展示会場での簡単な挨拶程度を考えていたのだが、コロンビア側の計らいで100人ほど入る教室が別に準備された。最初に東亜図書館のHeinrick館長から挨拶があり、甲斐さん、続いて角田柳作の弟子にあたるDonald Keene先生、James Morley先生からそれぞれ角田柳作にまつわる思い出を語っていただいた。100人ほど入る会場は満室、日本人会関係、コロンビアに学ぶ学生など、さまざまな人がユーモアを交えた3人のお話に聞き入っていた。

展示会場に移動し、宗像副館長とコロンビア大学図書館のNeal館長から開催の挨拶をいただいたのち、来場者



に自由に展示をご覧いただいた。見学された方たちのお話を聞くと、一様に「角田についてはよく知らなかったが、今回の展示でその偉大さを再認識した」「こうした機会はこれからも必要ですね」といった声が聴かれた。まずは無事に開会を迎えることができ、一安心といったところであった。

新学期を迎え、来場者の増加が見込まれることもあって会期の延長が決定、9月23日まで開催された。11月末の図書館総合展(26～28日、パシフィコ横浜)でも角田柳作に関するパネル展示、講演会をおこなうことが決定し、また上毛新聞(群馬地方紙)では角田に関するコラムも連載された。著作集の刊行こそまだだが、角田柳作はまだまだ終わらない。

展覧会案内

松尾 亜子(資料管理課)

早稲田大学図書館所蔵 西洋古版本展
ルネサンスの書物とパラディオ『建築四書』

会場 総合学術情報センター2F 展示室

会期 2008.10.24(金)～11.20(木)

※10.26(日)を除く日曜、祝日は閉室

時間 10:00～18:00

早稲田大学図書館では、インキュナブラとよばれる西洋活版印刷の最初期の版本をはじめ、ヨーロッパの古書・貴重書を多数所蔵しています。今回は、15～16世紀にイタリアで刊行されたものを中心に、館蔵の西洋古版本を展示、ルネサンス期に出版されたギリシア・ローマの古典、そしてダンテ、マキャヴェリ、ヴァザーリなど同時代人たちの著作に加え、今年が生誕500年にあたる建築家アンドレア・パラディオの著作コレクションを紹介しました。

(表紙および16ページ参照)



〈会場の様子〉

西洋古典資料保存講習会に参加して

夏井 友子（資料管理課）

本講習会は一橋大学社会科学古典資料センターによって行われ、今年で第9回を数える。

保存とは「そのままの状態を保つこと」であるが、古典資料の保存は字義通り、現状をできるかぎり維持することを目的とする。

資料の敵はまず、虫、カビであり、保存対策は環境の保全が筆頭である。今日では薬剤を使用した根絶よりも、予防的な措置が注目されている。

書庫内の温湿度の管理のためにはデータロガーを設置し、環境が防カビに適した範囲内におさまっているか、外部環境にどの程度影響を受けるものか、常時計測してデータを蓄積しておくことが望ましい。でないと非常事態が起こってもそれと気がつくことができない。資料にとって理想的な環境は温湿度がなるべく均一に保たれることであり、空調があっても、開口部等からの外気の影響が大きければ温湿度は変化する。ヨーロッパの古い図書館などには、分厚い石造りであるために、空調などなくとも内部の温湿度が保たれている例がある。日本ではそうはいかないが、正倉院に見られるように、空気の流れを保存環境の周囲に設けることで環境の変動を抑えることができる。建物としては外壁に接した部分に廊下や事務所を設け、内側に書庫があると、書庫の環境はより守られる。当館でいうとエレベータ・ホールのあたりがよく思われ、惜しいような気がするが、貴重書庫は外壁の中に入れ子の形で作られており、目的にかなっている。外壁に接していて利用者の出入がある古書資料庫と、どの程度温湿度の変動に差があるものか数値で測ってみたいものである。

非常事態、すなわち雨漏り、水害、火災等によって資料が被害を受けた場合には、即時に資料を密封・凍結するのがよい。状況の進行を止め、専門家の指示を仰いで対策を講じる時間を捻り出せる。水害などで資料がぬれた場合、乾かそうとすると紙が傷んだり、カビが発生したりする。ぬれたまま冷凍したほうが現状を維持できる。非常時に使える冷凍庫の確保、ドライアイスの入手経路

の確保を推奨された。理工系研究施設で使用する低温装置は、精密さを要求されるため特異な目的の使用は断られるし、食品系の冷凍庫も、保健衛生の観点から洗い顔をされるということである。

虫については、書架・資料を視認によってチェックする。例えば資料を書庫に入れる前に前室に置き、汚染の有無を確認することは有効である。書庫環境がよければ持ち込まないことが肝要になる。冷凍という手段は防虫には効果的で、たとえ小さな釣用冷凍庫であっても、時間をかけて冷やし切れば十分な効果が得られるそうである。

すでに破損のある資料についても現状維持が目標であり、現物に手を入れることは極力行わない。古典資料の補修は可逆的な方法が原則である。センターでは表具の技術を応用し、洋書についても和紙と生麩糊を使った補修方法を編み出している。一例として、Micro-dot-adheringという手法は、微細な点状に糊付けすることでページを傷めずに補修用和紙を接着する方法であるが、市販のマジックテープとゴム板を使って、素人でも脅威（資料に対する脅威である）にならない補修ができるように工夫してある。現物のサイズや状態にぴたりと合わせた保存箱やバインダーも、在架時に破損が進行することを防ぐ。資料のマイクロ化、デジタル化により現物を使わずに利用目的を果たせるようにすることも、間接的に資料を保護する。

センターの知識・技術は実践から生まれたものであり、一点一点の現物と向き合って工夫を重ねてきている。図書資料の修復技術を持つ専門家が全国的に少ないという状況もあり、外注に依存するよりも経費・事業計画の面で利点があるという。講習会を開けるほどの経験を蓄積しているのもその成果であり、同時に資料・環境に対し、館員の理解は深まる。貴重書保存修復工房をもつ図書館は稀少であるが、長期的に見てその意義は小さくないと、恩恵に与って思うところである。

早稲田大学図書館への寄贈図書について

宇田川 和男（資料管理課）

1. 早稲田大学図書館は資料の収集にあたり、先輩・先人をはじめ、学内外の篤志家・後援者の方々から、さまざまな形で資料のご寄贈をいただいている。そうした図書館への寄贈資料の申し出に際しては、現在以下のような基準に従って処理をおこなっている。

(1) 資料の保存・管理場所

資料の保存箇所は、それぞれの形態・内容等、及び現蔵者との事前の交渉により、研究書庫・特別資料室・雑誌書庫など適宜対応することとし、利用規程についてはそれぞれの配架場所の規定に従う。

(2) 重複資料の処理

図書館所蔵資料と重複するもの、受入が不適当と判断されたものについては、それらの処理について原則として本学に一任いただくことを前提とする。

そして、これらの処理方針について了解をいただけた場合に寄贈を受けている。近年の実績は以下のとおり。又、寄贈の他、学内各箇所からの移管・返還図書についても同様の処理を行っている。

2. 重複本の有効活用

上述の重複本については、学外諸機関への寄贈用としても有効活用を図っている。

3. 「早稲田大学図書館所蔵リサイクル用図書データベース」（通称：寄贈図書データベース）

前述した重複本の有効活用のために学外他機関への寄贈も行っているが、そのための図書を2003年から日常的にストックすることを開始して現在に至っている。図書は日本十進分類法の大分類によって分け、箱に梱包した状態で保管している。提供先は本学と協定関係にある国内外の大学及び研究機関を中心に、世界各地に及んでいる。寄贈は箱単位とし、送料は原則として先方に負担をお願いしている。これらの図書は、書名・著者名・出版者での検索が可能であり、最大8万冊程度の規模で収蔵している。申し出を受理した後に一定期間データベースを検索してもらい、希望のあった箱を提供するのだが、近年は和書の需要が多いため、和書のストックを優先的に進めている。

以上のように図書館では、ご寄贈いただいた図書の有効活用に力を注いでいる。今後とも多くの皆様からの御支援、御協力をお願いする次第である。

■近年の受贈数

	(1)大口寄贈		(2)小口寄贈		(1)+(2)	(3)移管・返還	(1)+(2)+(3)
	件数	冊数	件数	冊数	冊数	冊数	冊数
2003年度	22	32000	131	2000	34000	15000	49000
2004年度	12	14000	127	1700	15700	11000	26700
2005年度	12	24000	150	2200	26200	17000	43200
2006年度	9	28000	174	2900	30900	8000	38900
2007年度	6	13000	160	2000	15000	7000	22000
2008年度	2	3000	88	1700	4700	1700	6400

注：2008年度は2008年9月末現在

冊数は概数

小口寄贈にはこれ以外に法人・機関からの寄贈があるが、ここには含めていない

■学外諸機関宛寄贈実績

	件数	和書(冊)	洋書(冊)	雑誌(冊)	合計(冊)	合計箱数
2003年度	6	16213	116	567	16896	321
2004年度	3	11074	602	0	11676	408
2005年度	5	11869	1739	0	13608	348
2006年度	3	23426	12807	0	36233	1041
2007年度	2	1118	0	0	1118	23
2008年度	2	7608	0	0	7608	164

注：2008年度は2008年9月末現在

■提供可能数（2008年9月末現在）

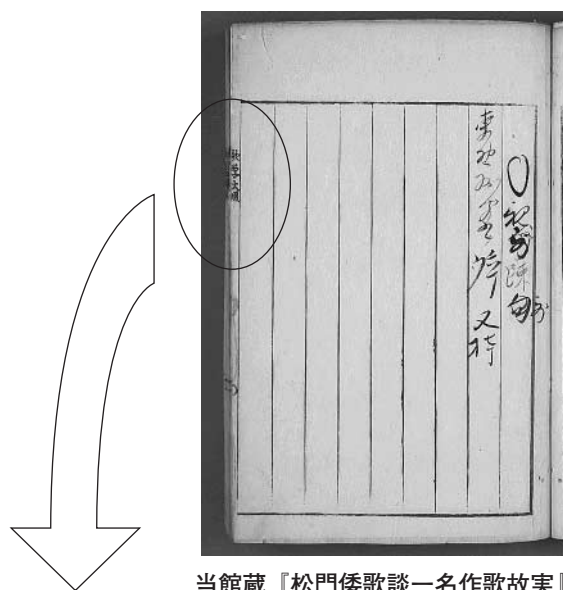
日本十進分類	主題	和書(箱数)	洋書(箱数)
0	総記	48	15
1	哲学	71	32
2	歴史	174	41
3	社会科学	385	175
4	自然科学	19	23
5	技術	15	7
6	産業	32	8
7	芸術	88	12
8	言語	75	38
9	文学	264	84
	計	1171	435

途絶した『歌学大成』—その用箋のこと—

松本 智子（特別資料室）

1. 歌学大成用箋について

当館の貴重書の中には、下の図版のように、料紙の柱に「歌学大成」と刷られた用箋を使用する資料が存在する（次頁表参照）。これまでに確認された8点はいずれも小山田与清の自筆本で、内容は『歌学大成』ではなく、ほかの内容が記されるか、あるいは遊紙とされるなど、全く別の用途に利用されている。紙のリサイクルである。



当館蔵『松門倭歌談一名作歌故実』



小山田与清（おやまだ ともきよ、1783-1847）は近世後期の学者であり、本学の創立に尽力した高田早苗（1860-1938）の曾祖父にあたる。与清の自筆草稿類が高田家より当館に多く寄贈されてお

り、先の8点もこれに含まれる。与清は2万巻あまりの典籍を書庫“擁書楼”に蔵し、そこには大田南畝・平田篤胤・谷文晁など多くの文化人が集ったことはよく知られている。

与清の著作は、『国書総目録』によると304種に及ぶが、未刊のものも多い。『歌学大成』もその類と考えられ、現在、無窮会専門図書館（請求記号神習10697、以下「無窮会本」と略称）に草稿本一巻が残るのみである。

無窮会本には凡例があり、それを書いたのは与清の門人篠原善一（生没年未詳）である。善一は文政9年（1826）7月に刊行された与清著「歌詞考」（『松屋叢考』所収）の挿絵を書いており、「師命を奉り模写した」とあることから、既に文政9年以前に入門していたことが知られる。また、与清家の歌会にも参加しており、与清の『倭学戴恩日記』（当館蔵、㊗6-5759）天保2年（1831）9月14日条には「篠原善一 富士見御宝蔵番篠原弥兵衛男貞蔵」として善一の和歌が残っている。

6丁にわたる善一の凡例から、『歌学大成』作成の目的や経緯をうかがうことができる。意約すると以下ようになる。

与清は、歌を詠む人、特に初学の人のために書いた良い書物がないのを不満に思っ、長年広い視野に立った正しい書物を作ろうと、資料を博搜し様々な事項を抜き出しておいた。その量は長唐櫃二・三棹ほどになってしまったけれども、自分の名の上がるにつれ、門弟も増え、諸所の貴人からの招聘もあるため、多忙きわまりなく、手も触れずそのままとなっていた。それを善一は目にするたびに勿体無く思い、「かの書物はどうするのですか」と与清に質問すると、与清は次のように言った。「今の忙しさでは、刊行はいつのこと分らない。無駄に紙魚の住処になるかもしれないし、塵になってしまうのは悲しいので、公務の合間を使って思うままに書き整えてみよ」。善一も毎日公務に追われる身のため、成し遂げるのは簡単ではないが、そうかといって（このまま無駄にもしておけない）」と思い、日々、夕方から日暮れにかけて与清のもとへ

行き通り、例の抜書を分類し、読み、考え、これを作成した。

このようにして第一巻は善一により編集されたのである。この無窮会本の内容から判断するに、『歌学大成』は歌語辞典と考えられるものである。

2. 出版目録および広告から

『歌学大成』について記した出版目録のうち、早いものとしては、文政3年（1820）2月刊行の『草縁集』（当館蔵、V2-4313）に付された文生堂と耕文堂による「蔵板目録」がある。『擁書漫筆』など26点の広告の最後に『歌学大成』が掲げられ、以下のような宣伝文が記されている。

歌学大成 松屋高田大人著 五十巻 近刻

哥よみ文かくべき故事又はおもしろき詞ともをあつめ、證哥をあげて詩学大成円機活法などの体に考証。正しくものせられたる書也。歌学者流此書を懐中秘とせば万巻の書をみしにおなじかるべき大有益の書なり。（濁点、句読点は引用者による。以下同。）

2ヶ月後の4月に刊行された『勸善録』（当館蔵、ロ9-2142）の広告にも、「歌学大成 五十巻未刻」と記され、同年10月には書林勝村治右衛門より出された『墓相小言』（無窮会専門図書館蔵、請求記号神習9625）の広告に「松屋高田先生及社中著書目録」があり、そこには「歌学大成 松屋高田先生著 五十巻 未刻」に続いて、先の『草縁集』とほぼ同じ宣伝文が記載されている。『歌学大成』は遅くとも文政3年には全50巻の刊行が予定されていたと言えよう。

ただ、文政3年2月の時点では「近刻」であった『歌学大成』が4月には「未刻」となっている点は注意してよい。刊行を公表したものの、すぐに停滞したのであろうか。その後の、出版目録や広告に『歌学大成』が記されることはなかった。

ところで、当館所蔵の資料以外で歌学大成用箋を用いたものに茨城県立歴史館蔵『小山田与清遺稿』（請求記号5-26）がある。これも当館の資料と同様、『歌学大成』とは別の内容が書かれており、その中に与清自筆による文政10年（1828）の記述があることから、それ以前には既に『歌学大成』の作成は途絶して、準備されていた歌学大成用箋は本来の用途を失っていたことが知られる。

用箋を準備した背景には50巻刊行という遠大な

計画があったはずであろうが、巻一の草稿はできたものの、完成には至らなかったのである。

3. 残された用箋

『歌学大成』の刊行が途絶したのはなぜか。与清の日記は文政3年2月14日から天保2年までが欠けており、刊行が途絶したであろう時期の動向を知ることができない。今のところ理由は不明と言わざるを得ないが、善一著『治政談』の跋文（著者不明）には、善一について「年経て身をいためしはぶき出る病にかゝり久しくなやまれけり」と記されるほか、病気がちであった様子がうかがえる。想像の域を出ないが、実質的な編集を担っていた善一の健康上の理由があったのかもしれない。何れにせよ、「万巻の書をみしにおなじかるべき大有益の書」となるはずの『歌学大成』は水泡に帰し、用箋だけが大量に残されたのである。

50巻分の用箋とはどのくらいの枚数であろうか。無窮会本一卷が全30丁であることから概算すれば1500枚ほどが必要になる。現在確認できる用箋の枚数は、当館所蔵資料と茨城県立歴史館蔵『小山田与清遺稿』を合わせても約600枚、全体の3分の1強に過ぎない。

江戸時代の学者の著書には、刊行予定を公表しながらも未刊であることは多く、与清の著書の場合も例外ではない。ただ今回の例のように大量の用箋を準備していながら途絶した例は、与清の著作の中には他に見当たらず、特異な例と言えよう。

それにしても、残された用箋を使う与清の気持ちはどのようなものであったのだろうか。

資料名	請求記号	用箋枚数
松門倭歌談一名作歌故実	V4-5047	76
松屋棟梁集	V2-4772	293
衣手日記	X6-5760	13
律令便蒙	W3-6610	22
水葱考	Z14-2292	17
松屋筆記	V5-1397	4
松屋外集 二編	V5-1398	42
松屋反故集	V5-1406	79
	合計	546枚

〈表：歌学大成用箋を使用した当館所蔵資料〉



図書館だより

2007年度 図書館日誌 (中央図書館)

2007年

4. 1 入学式につき図書館を開放
4. 6 国立成功大学(台湾)文学院長一行来訪
4. 17 中国人民大学副学長一行来訪
4. 24 ケント大学(イギリス)副学長一行来訪
5. 15 広西師範学院(中国)学長一行来訪
5. 16 復旦大学(中国)一行来訪
5. 21 4限より麻疹のため閉館(5.29まで)
6. 5 ニューヨーク州立大学アルバニー校(米)副学長来訪
6. 6 図書館協議会(第1回)
6. 6 ベトナム教育訓練省副大臣一行来訪
6. 7 サウジアラビアムコ社一行来訪
6. 27 図書館協議会(第2回)
6. 28 高苑科技大学(台湾)一行来訪
6. 28 中国共産党吉林省委宣伝部副部長一行来訪
7. 4 香港理工大学(中国)図書館員来訪
7. 6 青島大学(中国)大学院生日本研修団来訪
7. 6 東京都立産業技術研究センター一行来訪
7. 17 湘北短期大学図書館長一行来訪
7. 19 電子媒体検討委員会(第1回)
7. 23 夏季長期貸出開始(9.20まで)
7. 26 福島県立福島高等学校図書部一行来訪
8. 1 夏季休業期間につき開館時間短縮(9.20まで)
8. 2 中国人民大学学長一行来訪
8. 3 オープンキャンパスにつき図書館を開放(8.5まで)
9. 7 台風のため11時開館
9. 10 慶應義塾大学、立教大学実習生研修(各2名、9.21まで)
9. 12 中国湖南省人民政府副省長一行来訪
9. 20 中国珠海市人事局研修団来訪
10. 4 タマサート大学(タイ)副総長一行来訪
- 10.11 釜山大学(韓国)図書館員来訪
- 10.20 「早稲田大学創立125周年記念 角田柳作展 ～日米の架け橋となった“Sensei”～」オープニングセレモニー
- 10.20 ホームカミングデーにつき図書館を開放
- 10.21 創立125周年記念行事につき図書館を開放
- 10.30 早稲田大学創立125周年記念シンポジウム：角田柳作一日米の架け橋となった“Sensei”一開催
11. 6 図書館協議会(第3回)
- 11.16 日本・中国青年親善交流団(中国)来訪
- 11.21 国立台湾大学図書館副館長一行来訪
- 11.29 オマーン国家評議会議員来訪
12. 4 ウズベキスタン金融財政アカデミー副学院長来訪
- 12.10 電子媒体検討委員会(第2回)
- 12.10 タマサート大学(タイ)職員来訪
- 12.14 韓国国会図書館員一行来訪
- 12.17 国立台湾文学館館長一行来訪
- 12.18 図書館協議会(第4回)
- 12.23 冬季休業期間につき開館時間短縮(1.7まで)

2008年

1. 31 電子媒体検討委員会(第3回)
2. 1 図書館協議会(第5回)
2. 13 入試期間につき開館時間短縮(2.23まで)
2. 15 太原理工大学(中国)副学長一行来訪
2. 25 蔵書点検につき閉館(3.1まで)

3. 7 無錫市(中国)副市長一行来訪
3. 18 貴州大学副校長、貴陽医学院副院長、貴州財経学院副院長(中国)一行来訪
3. 25 卒業式につき図書館を開放
3. 31 高麗大学(韓国)職員一行来訪

早稲田大学図書館携帯サイトを公開

2007年7月より、図書館では携帯サイトのサービスを開始いたしました。

携帯サイトでは、
・中央および各キャンパス図書館のサービス時間および休館日
・蔵書検索(キーワード検索)
・利用者記録の照会(現在借用中圖書の確認、貸出延長手続き)
・緊急のお知らせ(気象警報発令による臨時閉館等のお知らせ)
といった情報を確認することができます。
なお、利用者記録の照会は専任教職員および在学生向けのサービスとなっております。
また、一部に本サービスをご利用になれない機種があります。
URLおよびQRコードは以下のとおりです。
ご利用ください。



<http://www.wul.waseda.ac.jp/m/> (日本語版)

<http://www.wul.waseda.ac.jp/m/index-e.html> (英語版)

ふみくら第76号の記事「OJS (Open Journal Systems) について」に誤りがありましたので訂正いたします。

誤) P.14 「2. 電子出版システム(OJS)の概要」26行目

...日本での採用例はまだないが、

正)

...日本での採用例はまだ少ないが、

〔表紙写真〕

パラディオ, アンドレア (1508-1580)

『建築四書』初版

ヴェネチア, 1570

PALLADIO, ANDREA, 1508-1580.

I quattro libri dell'architettura di Andrea Palladio.

Venetia : Appresso Dominico de' Franceschi, 1570. 4v. in 1. folio.

アンドレア・パラディオの建築研究書。200以上の木版の挿図を用いて、古典建築および、著者自身の作品を含むルネサンス建築を例示しながら、建築様式や技法を詳述したものである。版と翻訳を重ねたこの著書とともに、彼の建築理論はイタリア国内のみならずアルプス以北のヨーロッパ諸国へも広く波及した。第I書は設計・構造と古典建築のオーダー、第II書は住宅、第III書は古代建造物、第IV書は神殿についての記述であり、館蔵本は四書が合冊されている。

貴重書 F523 00684

〈所属名は原稿執筆時のもの〉

***** 早稲田大学図書館報 ふみくら No. 77 2008 年 12 月 1 日 発行 3,000 部 *****

***** 発行人／加藤哲夫 *****

***** 担当課長／藤原秀之 編集委員会／小井戸みつる・鈴木努 *****

***** 発行／早稲田大学図書館 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 ☎03-5286-1652 *****

***** ISSN 0289-8926 *****